

涙のペンダント

県立伊集院高等学校 三年

野上夏鈴

僕は泣かない。だけど、悲しいという感情はある。この国の人みんなそうだ。この国で生まれ育ったので、何も不思議に思わない。僕は『涙』を知らない。

目を覚ましてベッドから降り、机の上に置いてあるペンのノック部分を押して画面を起動する。技術が発達し、端末はペンタイプや腕時計タイプなどから自由に選べるようになった。今日の授業が午前中だけなのを確認してリビングに向かう。朝食を食べ終えたところで着信音が鳴り、自動で通話に切り替わる。

「おはよう、今日午後から時間ある？」

「あるよ」

「じゃあ、お昼一緒に食べない？」

「いいよ、門のところで待ち合わせで」

「分かった。また後で」

「はい」

レイは中学校からの友人で、よくご飯に誘われる。本屋に

行こうと思っていたので、ちょうどよかった。食器を洗って片付けていると、レチェが足にすり寄ってきた。レチェは家の近くのところに置いてあったダンボール箱の中にいた捨て猫だ。元々猫が好きだったので飼うことにしたのだ。餌を入れた皿を置くと、すぐに来て美味しそうに食べている。行ってきましたと言うと、尻尾を振って返事をしてくれた。

授業を終えて門に行くと、レイは画面を操作して動画を見ていた。レイの端末は腕時計タイプのものだ。

「お待たせ、レイ」

「大丈夫、そんな待ってないよ」

レイは画面を閉じると、大学近くの駅へと歩き出した。電車に乗りいつも降りる駅から二つ先のところで降りた。

「あれっ、いつものところじゃないんだ」

「たまには静かなところもいいかと思って」

「なるほど、たまにはいいね」

駅から少し歩くとレトロなカフェが見えてきた。店内に入るとコーヒーのいい香りがした。席に座りメニュー表を開く。サンドイッチやカツサンド、フレンチトーストなど美味しそうなメニューが並んでいた。数分間悩んで、カツサンドとサンドイッチを交換することにして、飲み物はコーヒーを頼んだ。料理がくるまでの間、レイは最近読んだミステリー小説の話をして、僕は最近よく聞く音楽の話をした。ちょうど話し終わったところで料理が運ばれてきた。一緒にいただきますと

言って、カツサンドにかぶりつく。カツのサクツとした食感とジューシーさにソースが合っていて美味しい。レイに一つ渡すと、サンドイッチをくれた。サンドイッチも具材と特製のマヨネーズがマツチしていて美味しい。店を出て、次の電車まで時間があったので散策をした。歩いていると、他の国から来たことを示すバッジを付けた女性に話しかけられた。

「あの、ちよつと聞きたいことがあるんです」

「どうしたんですか」

「なぜこの国の人は泣かないのですか」

「なぜかは分かりませんが、僕達にとってあたりまえなんです」

彼女はそうなんですかと悲しそうな表情で言い、こう続けた。

この国の友人の母親が亡くなったと聞いて葬式に行ったら、自分以外の人は悲しい表情はしているのに泣いていなくて、怖かったんです、と。他の国から来た人はそう感じてしまうのかもしれない。彼女は、僕達に一度頭を下げ去って行った。

大学近くの駅まで戻り、運動もかねて駅から少し離れた本屋まで歩いて行った。電子書籍が主流になったけれど、紙の本が無くなったわけではない。僕は紙の質感が好きだし、読んでいると実感できるので紙の本をよく買う。本屋に着き、最新刊のコーナーに向かう。分かりやすいポップの下に欲しい本は並べられていた。

「ああ、この人の本か。気になってるんだよね」

「この人が書く作品は、読んだ後に心が温かくなるんだ」

「そうなんだ、今度買おうかな」

「おすすめだからぜひ！ さっきレイが言ってた本、どこにあるの？」

「それならこっちだよ」

レイはミステリー小説のコーナーに着くと、一冊手に取って渡してくれた。

「けっこう巻数はあるけど、読みごたえはあるから」

「了解。集めるのも楽しいから大丈夫」

レイから渡された本も持ってレジに行く。本屋を出ると、空はオレンジ色に染まっていた。

「今度会ったときはお互いに本の感想を語り合おうね」

「分かった。約束」

「うん、またね」

レイは手を振って駅の方に歩いて行った。家に帰る途中、横断歩道の先で何か光って見えた。小銭かなと思いつつ、その場所に行く。そこにあったのは小銭ではなく、女性もののペンダント。チェーンの下には、不思議な形をした石か何かをはめる部分がついている。画面を開き交番を探すと、近くにあったのでこのまま向かうことにした。

交番に着き警官に落とし物のことを伝える。渡された紙に落ちていた場所や形状、色などを書く。警官には、持ち主が見つかったら連絡すると言われた。家に帰り、レチェと夕食

を食べると風呂に入る。買ってきた本を一冊読み終えてからベッドに行き眠りについた。

大学から帰り、家でレポートを書いていると、着信音が鳴った。

「この前、ペンダントを届けてくれた方ですか」

「はい、そうです」

「持ち主が見つかって、その方が会いたいとおっしゃっているのですが、来られますか」

「分かりました。今から伺います」

簡単に身支度を済ませて交番に行く。中に入ると僕と同じくらいの年齢の女性が座っていた。

「こんにちは。あなたが見つ付けてくれたんですね。ありがとうございます」

「どういたしまして」

彼女はリトスと名乗り、この国に留学生として来たと話してくれた。その後お礼をしたと言う彼女とパスタが美味しいと評判のお店に行った。彼女は季節限定のパスタを、僕はポロネーゼを注文した。料理がくるまでの間、彼女は自分の国のことを話してくれた。どれも興味深い話ばかりだった。そろそろ店を出ようとしたとき、彼女が問いかけてきた。

「あの、この国の人々が泣かなくなった原因について一緒に調べてくれませんか」

「いいですけど、なんで知りたいと思ったんですか」

「今ある国の中で、この国だけが誰も泣かない国なんです。何か特別な理由があると思って」

彼女の表情はとても真剣で、ただの興味だけじゃないことが読み取れた。僕達は連絡先を交換して、何か進展があれば連絡を取り合うことにした。彼女を駅に送ってから家に帰った。

「……駄目だ、全然分からない」

一番古い資料が置いてある歴史資料館に来ていた僕は、思わずため息をつく。あれから思い付く限りの場所を、休みや講義が終わった後に回っているが、何も無い。ここでも今のところ鍵となりそうな情報は見付けられていない。昼がまだだったので、外に出て近くのカフェを探していると、リトスから電話がきた。

「何か分かった？」

「はい、この国ではずっと昔に戦争があったみたいなんです」

「それは初めて聞いたな。どこからの情報？」

「この前、一度国に帰ったときに資料館に行ったんです。そのときに見た資料に少しだけ記述があつて」

「なるほど。そうだ、お互いが調べた情報を整理しておきたいんだよね」

「そうですね。場所どこにします？」

「リトスが嫌じゃなければ、僕の家はどう？」

「構いませんよ。明後日なら午後から空いています」

「僕もその日は授業午前中だけだから」

「了解です、では明後日に会いましょう」

「はい」

リトスに大学近くの駅までの地図を送り、そこで待ち合わせることにした。カフェで昼食を済ませ資料館に戻り、学芸員の人に頼んで一番古い資料を見せてもらった。メモを取りながら読んでいると、ふと違和感を覚えた。

「すみません、この部分の内容がつかないんですが」

「その部分は、ここに保管された当初から無くて。探しているのですが見つからないんです」

「そうなんですか」

「また何かありましたら声をおかけください」

資料館を出て、鍵屋に寄る。一つ合鍵を作ってもらった。家に帰りそれを引き出しにしまって、レチェにご飯をあげる。レポートを終わらせてからベッドに行った。

リトスと家に帰ってくると、レチェが玄関で出迎えてくれた。家の電気を付けて玄関に戻ってくると、リトスはまだ靴を脱いでいなかった。

「あの、この子は？」

「名前はレチェ。猫嫌いだった？」

「いえ、前にこの子とそっくりな猫を飼っていたことがあった」

「そうなんだ。人懐っこいから触っても大丈夫だよ」

レチェはリトスの前を歩きリビングまで案内して、リトスの近くで毛づくろいを始めた。リトスが撫でると気持ちよさそうにしている。僕は今まで集めた情報を報告して、原因は何かを考えてみたが、しっくりくるものは浮かばなかった。リトスが帰り準備を終えたのを確認して、一度深呼吸をしてから彼女の目を見つめる。

「僕ね、リトスのことが好きなんだ」

「え？」

「今まで好きになった人はいたけど、一緒にいて心地いいって思えたのは君が初めて。僕と付き合ってください」

彼女は顔を真っ赤にして固まっている。リトスが自分の国のことを楽しそうに話している姿や、協力を頼んでくれたときの真剣な眼差しがずっと忘れられなかった。たぶん一目惚れだ。

「返事は今すぐじゃなくていいから。君の気持ちをはっきりするまで待ってる」

「分かりました」

リトスに合鍵を渡すと、驚いた表情で僕を見た後受け取ってくれた。リトスを駅まで送り、家に帰ろうとしたとき母さんから電話がかかってきた。

「どうしたの、母さん」

「父さんが倒れたの、帰ってこれない？」

「分かった、今から帰るよ」

まだ駅にいてよかった。急いで電車のホームに向かう。電

車の中で、レイにメッセージで明日大学を休むこととレチエのことを頼むと伝えると、分かった、気を付けてと返事がきた。実家に着くと、すぐに父さんのところに行く。

「父さん！」

「そんなに急がなくてもよかったですぞ」

そう言って父さんは笑った。だけどその体はやせ細っていた。

「いったいどうしたの」

「それはな、これが原因なんだ」

見せてくれた右手の甲には、不思議な紋章が浮かび上がっている。そして、父さんは話してくれた。自分の一族にはある使命があつて、それを息子が二十歳になるまでに果たせなかつたら、この紋章が浮かび上がる。この紋章が浮かび上がれば残り三日しか生きられない、と。僕はそれを黙って聞くことしか出来なかつた。

それから三日後、僕達の看病も虚しく父さんは亡くなった。葬式には、父さんの仕事仲間や友人などが来ていて、レイの姿も見つけた。数日後、ようやく気持ち落ち着いたので書齋に行くことにした。父さんは最期に、

「俺が死んだら書齋に行け。机の上に手帳が置いてあるはずだ。そこに全部書かれている。頼んだぞ」

と言っていた。書齋に入ると、机の上に手帳があつた。そこには、僕の一族の使命や今調べていることの答えなどが全て記されていた。最後のページに父さんの字で、涙を結晶化

する力を持つ人を探せ。その人がペンダントを持っているはずだ。そのペンダントにお前の名前を刻んだ石をはめれば使命は果たされる、と書かれていた。僕が必ず使命を果たす、その決意を胸に秘め書齋を後にした。

次の日の夕方家に帰ると、レイがレチエに餌をあげているところだった。

「ただいま、レイ」

「おかえり、ご飯食べてきたの」

「まだ食べてないよ。先に風呂入ってくる」

「分かった。僕もまだだから何か作っとく」

「ありがとう」

風呂からあがると、もう出来上がっていた。レイは料理をするのが得意でよく作った料理の写真を送ってくる。さすがに片付けは僕がした。

「そろそろ帰ろうかな」

「泊まっていけばいいのに」

「家でレポート仕上げないといけないからね」

「僕もやらなきゃ。あつ、本の感想」

「今度、ゆっくり話せるときのほうがいいかも」

「そうだね。じゃあ、また」

「またね」

レイが帰った後、リトスに電話をする。

「夜遅くにごめんね」

「いえいえ、大丈夫ですよ」

「何で僕達が泣かないのかようやく分かったよ」

「本当ですか！」

「うん、今度そのことについて話したいんだけど時間ある？」

「来週あたりなら大丈夫ですよ」

「分かった。そのときにペンダントを持って来て欲しいんだ」

「了解です。ではそろそろ切りますね」

「うん、おやすみ」

「おやすみなさい」

メッセージで日にちや場所の地図を送ると、了解ですと可愛らしいスタンプが返ってきた。告白してからも、なるべくいつもどおりの会話するように心がけている。告白してから数日後の彼女の電話の声は緊張していたが、今の電話の声から緊張は感じられなかった。レチェを探すといつもの場所から丸くなって寝ていた。一瞬、首輪の一部分が光った気がした。たぶん鈴だろう。少し早かったけど、僕もベッドに向かった。

リトスと会う日、一回家に帰りトートバッグに必要な物を入れてから待ち合わせの場所に向かう。その途中、後ろから近づいてきた誰かに布で口を覆われた。全身がしびれて動けない。その直後、後頭部に強い衝撃が走り意識を失った。

目を覚ました僕は、辺りを見回した。どうやらここは教会のようだ。しかも、リトスと待ち合わせの場所に指定した教会だ。手を後ろで縛られている。縄をほどこうと試みるが、

なかなかほどけない。そのとき、こっちに向かってくる足音が聞こえてきた。次第に月明かりに照らされて、顔が見えてくる。

「……何で君がここにいるの」

その人物はレイだった。レイは僕の問いかけには答えず、氷のように冷たい視線で僕を見つめていた。

「じゃあ、質問を変えるよ。何でここに僕が行くことが分かったの」

「レチェの首輪にチップ型の盗聴器を仕掛けた」

あのととき光ったのは鈴でなかったのだ。しばらくしてリトスが走って僕のところに来た。

「どうしたんですか！」

「今は来ちゃだめだ！」

僕の叫び声に驚いてリトスは足を止めた。レイは僕に銃を向けているが、今来たら確実に彼女は撃たれてしまう。どうにか立ち上がり、声がしたほうを背にする。後ろから、走り去る足音が聞こえた。直後、レイはその場所に向けて一発撃った。弾は僕の腕をかすり、服に血がにじむ。レイが撃ったという衝撃で足が震えて、立てなくなった。

「俺は、君を止めるためにここに来た」

一人称が変わっているし、雰囲気からもいつものレイではないことは確かだ。

「レイに止められても僕はやるよ」

立てなくても、レイから視線はそらさない。ふと手首から

縄の感覚が消えた。

「この国に涙を取り戻そうとする奴がいたら殺せって言われてるんだ。涙は弱さの表れだ。そんなのはいらぬ」

レイは銃口を僕の頭に向けている。怖い。すごく怖い。そして悲しい。でも、リトスを守らなきゃ。その思いが、僕を奮い立たせる。もう一度立ち上がる勇気をくれる。

「確かにそうかもしれない。でも、人は感動したり嬉しいと感じたりしたときにも涙が流れるってレイがすすめてくれた本に書いてあったんだ。涙がどんなものか知らないけど、弱さだけを表すものじゃないはずだ」

レイは目を見開き、銃を床に置いた。レイに僕達を襲わななことを約束させた。メッセージで、リトスに来ていいよと送ると走ってやって来た。レチェを抱っこして。そして、僕は二人に語り始めた。この国の人々が泣かなくなった物語を。

昔この国の人々は平和に暮らしていた。国王もそんな国民たちの姿を見て幸せだった。しかし、その平和は突然奪われた。ある日、他国で噂が流れた。『涙を結晶化する力を持つ人々が暮らす国がある。その涙は高く売れるらしい』と。その噂を信じた一つの国がこの国を攻めてきたのだ。確かに国民はその力を持っていたが、みんなで安心して暮らすために隠してきた。国中のいたるところで泣き叫ぶ声が聞こえた。目の前で、家族が、友人が、愛する人が殺され涙を流せば、その涙は奪われた。その惨劇を目の当たりにした国王は隣国の魔法使いに助けを求めた。

「国民がもう泣かないようにしてくれないか」

「分かりました。私の魔法を使えば可能です」

「そうか。よかった」

「ですが、将来この国に涙を取り戻すための力を残しておかないといけません。私の一族には『涙を結晶化する力』を継承させましょう」

「他に何が必要なのだ」

「この力を継承している人が持っているペンダントに名前を刻んだ石をはめるのです。そうすれば涙を取り戻すことができます」

継承している人見つけられなかったときの代償を聞くとそれを恐れて誰も名乗り上げなかった。だが、勇気ある騎士がその役を引き受けた。そうして悲劇は終わった。その代わりにこの国から涙が消えた。

僕の話聞いた二人は、驚きの表情を隠せていなかった。

「俺は間違っていたのか」

レイはそう呟くと立ち上がった。去ろうとしたその背中に呼びかける。

「まだ本の感想語り合っていないからね。落ち着いたら戻ってきて、約束しろ」

レイは一瞬何かこらえる表情を浮かべ、ごめんと謝り暗闇の中に消えていった。

「たぶん僕がその騎士の、リトスは隣国の魔法使いの末裔だね」

「そうだったんですね。確かに私には『涙を結晶化する力』があります、自分しかいなかったのも誰にも言えなかったんです」

僕は教会を出て、星が綺麗に見えるところに来ていた。すると、彼女は突然手で顔を覆った。

「すみません、あなたが無事でよかったですと思ったら安心して泣けてしまつて」

「それが『涙』？」

彼女の頬を伝うそれを見つめた。とても綺麗だと思った。

「はい、そうですよ」

リトスは微笑んで、僕に涙の結晶を渡した。それをペンダントにはめて、上の部分に石をはめる。するとペンダントは光を帯びた。その光は上空で弾け、国中に降り注いだ。

「そういえば、名前を聞いていませんでしたね」

「僕の名前はカルナだよ」

「カルナさん、ずっと待たせてごめんなさい。返事は、はいです。よろしくお願いします」

「こちらこそ、よろしく」

良かった。思わず笑みがこぼれる。彼女も笑っていた。リトスは、一度教会から去ったあと縄をほどこくための道具を取りに僕の家に向かったらしい。家に入るとあまりにもレチエが鳴いていたので連れてきたのだと言う。彼女は、他国で魔法は使うなど言われていたのに「気配を消す魔法」をレチエに使い、縄をほどいてくれたのだ。縄がほどけたら足の震え

がおさまり、もう一度立つことが出来た。いつものようにリトスを駅まで送り、今度デートに行く約束をした。レチエに今日のご飯はいつもより高いやつだよと話しかければ、尻尾を大きく振って嬉しそうに鳴いた。

家への帰り道、レイのことを考えていた。あのとときの表情は泣くのをこらえていたのかもしれないと今なら思える。どうかレイが泣けていますように。そう願って僕は初めて『涙』を流した。